

瀧澤さん手話、筆談、アブリで「一体感」



開会式の「100年の1日」

では3つのシーンがあり、うち聴覚障害者を巡る過去と表現したシーン1と、そこへ至るまでの練習を通じ、感じた思いを寄稿してもらった。

刻む編 下

パフォーマー



東京デフリンピックの閉会式で盆踊りをアレンジした「ポンミライ！」を楽しむ各国の選手ら＝いずれも東京体育館で

海外の選手たちと共に閉会式に出演した瀧澤さん（本人提供）

東京デフリンピックの開会式では、聴覚障害のある筑波技術大2年の瀧澤優さん（20）がパフォーマーとして出演し、会場を盛り上げた。「聞こえる力に関係なく、誰もが輝ける社会を発信したい」と臨んだ大舞台と、そこに至るまでの練習を通じ、感じた思いを寄稿してもらった。

開会式の「ポンミライ！」では、未選手たちと一緒に踊りました。閉会式では音楽とともにカウントを取り、振りの流れを見た。また、自分の中でのリズムを体で感じ取りながら

見え、流れを体に染み込ませるようにしていました。閉会式では太鼓の振動があり、それを体で感じ取りながらズムを合わせていました。練習は、聞こえる人と聞こえない人が一緒にやって取り組みました。聴者と話す時は手話通訳者のそばや筆談、メモアブリで会話をしたり、簡単

状況に合わせて工夫しました。開会式では音楽とともにカウントを取り、振りの流れを見た。また、自分の中でのリズムの動き、振りの流れを見た。また、自分の中でのリズムを体で感じ取りながら

見え、流れを体に染み込ませるようにしていました。閉会式では太鼓の振動があり、それを体で感じ取りながらズムを合わせていました。練習は、聞こえる人と聞こえない人が一緒にやって取り組みました。聴者と話す時は手話通訳者のそばや筆談、メモアブリで会話をしたり、簡単

な手話や身ぶりを使ったり、さまざまな方法で「コミュニケーションを取りました。おかげで振りのタイミングを共に確認し、分からぬ部分を細かく共有することができ、互いに安心しながら練習できた

と感じています。閉会式では踊る時間以外に、いろいろな国の人たちと一緒に、国際手話で会話を少しだけ、練習では違つて空氣で話すことができました。どう

しても通じないところは身ぶ

りで伝えいました。気持ちで向き合うことの大切さを改

めて強く感じました。「その

衣装いいね！交換する？」

と言われ、思わず笑い、「さ

く楽しかったです。

本番は練習とは違つて空氣で

緊張もしましたが「失敗してもいいから、全力で思いきり

楽しもう！」と気持ちを切り替えてステージに立ちました。

おかげで、練習以上に集中できました。終わった瞬間に緊張がほぐれ、近くにいた仲間と自然と目が合って、思わず頬が緩みました。

同じステージに立った一体感がとても心に残りました。

いろいろな人から「すご感動したよ！」と声をかけてもらえて、本当にうれしかったです。

喜び、勇気「人生の軸」

練習スタートから本番までの3ヶ月。聞こえる聞こえないに関係なく、リズム、動き、視覚的な合図で「一体感」を生み出せることができ、みんなの心を一つにすることができて良かったです。とても貴重で忘れられない経験になりました。

未来へつなぐ開閉会式

11月15日に開会式、26日に閉会式をいずれも東京都渋谷区の東京体育馆で開催。生まれつき聞こえない俳優・演出家の大橋弘枝さんと、聴者の振付家でダンサーの近藤良平さんが演出した。舞台上と客席で、聴覚障害者を含む計約130人のパフォーマ

ーが出演。

開会式ではデフリンピックの歴史を、聴覚障害者の過去・現在・未来で表現する「100年の1日」を上演。閉会式では盆踊りをモチーフに、大会が始まったフランスの言葉で「良い」を意味する「ポン」と日本の盆をかけて未来につなげる「ポンミライ！」を繰り広げた。

また、ろう者として自分が前に立つことで、誰でも安心して参加できる場づくりに少しでも貢献できれば。この3ヶ月で得た「体感・喜び・挑戦する勇気」を、これから的人生の軸として大事にしていくたいと考えています。